# around me

虹雪まい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａｒｏｕｎｄ　ｍｅ

【Ｎコード】
Ｎ８１６４Ｌ

【作者名】
虹雪まい

【あらすじ】
だれしもきっと、一度や二度は物語に憧れを抱くもの。「あの映画のヒロインになりたい」「あの漫画の主人公になりたい」「あの推理小説の主人公のように犯人を追い詰めたい」・・・でも、日常にも意外とドラマは潜んでいるのです。そんな日常のドラマを切り取った、笑いと涙のストーリー。ちょっと疲れたあなたに捧ぐほんわかエピソード短編集です。

## ｅｐｉｓｏｄｅ１　伝えたい言葉（文学系）（前書き）

これらの作品は全て虹雪まい本人、またその家族や友人から伝え聞いた体験談のところどころに脚色を加えたものです。半ノンフィクションと言ったらいいでしょうかね。

掲載している作品の全てにおいてその体験者や登場する人物には許可を得ておりますのでご理解のほどよろしくお願いします。

あくまでも『半ノンフィクション』なので事実と異なる点も多く存在しています。また私の記憶が定かでない部分はかなり曖昧な記述もあるかと思いますが、温かく見守って頂けると幸いです。

・・・では、長々と語りましたが本編へどうぞっ☆

## ｅｐｉｓｏｄｅ１　伝えたい言葉（文学系）

ゆっくりと時が流れていた。

葬儀全般の終了のあと、焼香を終えた親族が孫である私の前を横切っていく。祖父を亡くしたばかりの私を気遣い、また、一人暮らしとなる祖母を見てやってくれと私に頼むために、何人もの親族が私に声をかけてくれた。

遺族となった父、母、祖母は、私に荷物を預けて私の背後、式場の入口で忌中引きの料理と粗品を親族に手渡している。ちなみにどうでもいい話ではあるが粗品は椎茸（しいたけ）だ。

そんなこんなで私は、式場最前列に取り残されている。好き好んで残ったのだから『取り残された』と言う表現は間違いかもしれないが。

ここ数日、親類に囲まれて生活していたためか、やけに静かに感じられるのが少しさみしい。とはいえ、背後から聞こえる沢山の靴音があるため、明らかに学校の授業なんかよりはうるさいはずだが。

膝の上に家族の荷物を乗せて、私は目の前の祭壇を見上げた。

祖父の遺影。先程お骨を拾ったというのに、私はまだあんなに元気だった祖父が亡くなったということが信じられなかった。

三週間前には一緒にお寿司を食べた祖父。また、家族みんなが大好きな焼鳥を一緒に食べに行くぞと、笑っていたあのじいちゃんの笑顔をもう、見ることはないのだ。

背後で聞こえていた、たくさんの靴音が減ってきた。私は何度か祖母や両親を振り返り、様子を確認した後、再び祭壇を見上げた。まだ、時間がかかりそうだったから。

そういえば祖父とはあまりまともに話をしたことはなかったかもしれない、と、ふと思う。幼い頃はよく公園や海、山、色々なところへ連れて行ってもらったものだったが、ここ最近、まともな会話はしていなかった。

それは喧嘩をしたからとか、仲が悪いからではなくて、祖父も私も、どことなく話すのが恥ずかしかったのかもしれない。なぜかと言われれば答えに困るが、しいて言うならば私がなかなか時間をとれず、祖父母に会いに行かなくなったのがその原因の一つだろう。

そんなこともあって一つだけ、私はこのお葬式全般にあたり、後悔していることがあった。祖母も母も、棺に花を捧げる際にかけていた言葉。心に何度も浮かんだのに、私は一度も口に出すことができていなかった。

恥ずかしかったのか、はたまた言ってしまえば涙を堪え切れなくなることを心のどこかで感じていたのか。私自身よくわからない感情が、その言葉を私の口から出させなかった。

そんなとき、すぐ背後で二つ、三つ、靴音が聞こえた。なんの変哲もない、少し大きめの靴であろう固い足音である。普段物音をあまりたてない父の足音にしては大きいようにも思える。

私の右斜め後ろあたりで止まったその靴音に、私は何の気無しに振り返った。

「・・・！」

私は、一瞬自分の目を疑った。

そこには、誰もいなかった。

それでも、私はすぐにその状況を飲み込むことができた。今思えば、不思議なほどに落ち着いていた。

そして私は、何もない何も見えないその場所に向かって、そっと念(おも)った。

「里沙(りさ)、荷物ありがと。」
「あ、うん。お疲れ様。これで、帰るんだよね？」
「うん。里沙も疲れたでしょ？」
「母さんやばあちゃんよりマシっ。」
「・・・もう、ほんとにあんたは・・・。」
「さて、帰り支度しなきゃだねっ。」

言わなくても伝わってたんだね。でもやっぱり、伝えなくてごめんなさい。これからは、もっとたくさん遊びに行くから。ばあちゃんが寂しがらないように。だから見守っててください。

「今まで、ありがとう。」

## episode2　リスペクト

「なあ、真帆、この記事見てみろよ。」

学校について、驚いた。生徒会がお知らせを貼っても基本的に誰も見てくれない掲示板に、異例の人だかりがある。

不審に思いつつも、まあいいか、と通り過ぎようとしていた生徒会長は、クラスメイトに呼び止められて振り返る。

「え？」

「うちの学校、なんかすげえ賞とったみたいだぞ。」

彼の指さす先に見えた文字に、真帆は目を見開いた。身に覚えのあるコンクールの入賞校が発表されている。

大賞と特別賞が太字で記されていて、特別賞の欄に彼らの高校名がドーンと載っていた。

「発表今日だったんだ……知らなかった……っていうか偉い事になってる……」

「やっぱりこれ獲ったのお前か？　言ってたもんな、弁論大会出るって。すげえじゃん、審査員特別賞？」

「生徒会長なんだからとりあえず出ろ、って言われたから思った事殴り書きしてスピーチしただけなのに……ええ……どうしよう。」

商品として何やら学校図書５０万円分と、全校生徒分の変なロゴの入ったよくある鉛筆が贈られるらしい。

「どうしようって……いいんじゃねえの？　お前ヒーローじゃん。」
「いや……そうだけど……」
「……何、そんな酷いスピーチしたの？」
「なんか他の人みたいに身ぶり手ぶりとかなかったし、私。絶対負けたと思ってた。」
「ふうん？　原稿とかないの？」
「あるけど。」
「見ーしてっ。」
……拒否権は、なかった。

私は昨年、父方の祖母と母方の祖父を、二ヶ月間で一気に亡くしました。
その当時のことは、正直あまりよく覚えていません。ただ、皆バタバタとあわただしく動き、人の往来など、とても忙しかった事だけは記憶しています。

祖母は生前、とてもまじめで、心優しい、典型的な『おばあちゃん』でした。
祖母の家が我が家のすぐ裏手にあるので、幼いころ私は毎日のように遊びに行きました。運動神経の悪い私があちこちで転んだりぶつかったりするのを見て、祖母は半分泣きながら、監督者である両

親をしかっていたものです。
包丁が危険だから、と料理をさせてくれなかった事については、ちょっと今の私に支障を来している面がなきにしもあらず……ですが。
そんな祖母が、恐らくあれは認知症だったのでしょう、おかしな言動を繰り返すようになったのは、亡くなる一年ほど前の事でした。
……そこからは、まるで一瞬。
一人でご飯を食べられなくなり、トイレに行けなくなり、体を起こすことさえ困難になって。はじまった、という実感のないまま、在宅介護が始まりました。
……私は、何もできませんでした。
祖母がそうなってしまってからは、一日おきに遊びに行って、きたよー、と挨拶し、自分の用事を済ませた後は、またねー、と帰るだけ。
……出来る限りこんなばあちゃんの顔を見たくない、近づきたくない。
要は、信じたくなかったのです。老いて再び児になる、そんな祖母の姿を。
トイレに連れて行ったのも、たったの一回きりでした。
その点、娘である伯母と、嫁の母は、本当に、本当に凄かった。
本人たちは、受け入れられなくて辛く当ってしまった、と後悔しているようですが、私はそれでも、伯母と母は素晴らしかった、と、心から尊敬しています。
確かに二人とも、わがままを言うようになった祖母をしかりつけたり、無理やりにでも歩いてトイレに行かせたりしてはいました。
でもそれは、元気だったころの祖母に戻ってほしい、その一心でのことだったのです。
私と違って、逃げたりしませんでした。毎日、半分ノイローゼになりながらも、もう、ちょっとした話さえ通じない祖母と、向かい合っていました。

父も、そんな伯母と母の怒声が激しくなったときは、止めに入ったり、諭したり、直接介護に携わる事は少なくても、やはり、気丈でした。
私はその件で改めて、両親や伯母、更には彼らをそんな風に祖母の、偉大さを知りました。

一方、祖父は亡くなる随分と前から入院しており、ずっと母方の祖母が見舞いに行き、看病していました。そう言うわけで、私はほとんど、祖父の闘病生活は知りません。
ただ、人工透析をせねばならず、摂取する水分量も制限されて、入院した当初から既に大分衰弱していたのだろうな、と、今となっては思い出されます。
初めは見舞いに行くと片手をあげて、よう、なんて声をかけてくれた祖父。孫である私に対しては照れくさかったのか寡黙であった祖父でしたが、私の顔をみると、いつでもにこにこと優しく微笑んでくれました。
そんな祖父も徐々に体を起こす事が出来なくなって、最後に見舞いに行った時には、もう意識はほとんどない状態でした。口も開けっ放し、体にたくさん管を通して苦しそうに息をする祖父の姿は、今でもはっきりと思い出せます。
臨終の際、夜間だったこともあり、学校から帰宅していた私は、その場に立ち会う事が出来ました。
痰がのどにつまり、苦しむ祖父ののどからそれを吸引してくれた看護師さん。医師の説明も様々あったような気がしますが、私は目の前で何が起こっているのか理解することで精いっぱいで、よくきいていませんでした。
祖父は静かに息を引き取りました。本当におだやかな死で、いつ亡くなったのか、立ち会っていたにも関わらず、私にははっきりと

わかりませんでした。
相変わらず開けっ放しだった口を閉じてもらったその顔は、ほんのり赤みを帯びていて、月並みな表現ですが、まるで、眠っているかのようでした。

さて、祖父が亡くなった次の日。
私も両親も母方の実家に一泊していたのですが、準備などのため一旦自宅へ帰ることとなり、報告を、と、その足で父方の祖母の家に向かいました。
珍しくその日、ほぼ寝たきりだった祖母が、居間の椅子に腰かけていました。子供のようにかわいらしい目でこちらを見て、何も知らず、いつも通り、いらっしゃい、と笑う祖母。
伯母は前日の家に母から連絡を受けていたので、全て知って頷きました。さすがにその雰囲気に違和感を感じたのか、祖母は母に尋ねます。
病院行って来たんでしょう。じいちゃんは元気？　と。
もう、日常会話さえままならなくなっている祖母。それでも入院中の母方の祖父の事は気にかけていたようでした。母は、言ってもわからないのであろう事を知りながらも、じいちゃん、亡くなっちゃったんだ、と、祖母に伝えました。
……あの時は、本当に驚きました。
祖母は、え、と声を発した後、震えながら、涙を流したのです。
何が起こったのかわからず、目を瞬かせる私たちに、祖母は、そうかい、かわいそうだ、かわいそうだ、と、何度も、何度も言いました。
思えば、祖母が自分の目下の願望以外の事を話したのは、あれが最後だったかもしれません。
よくがんばった、よくがんばった、そう言って涙をおとす祖母は、

そのほんの一瞬でも、まるで昔の元気だった祖母そのものでした。
いろんな感情がごちゃごちゃ混ざり合って、家族みんなで泣きました。何がどうであって泣いているのか、まったくわからなかったけれど、それでも、涙が止まりませんでした。

そのすぐ後に父方の祖母も入院し、一か月ほど後に息を引き取りました。
祖母の臨終に立ち会う事は出来ませんでしたが、最後に会ったときにきちんと、ばいばい、と声をかけられたので、その辺りはよかったかな、と思っています。
しかし人間とは、題材的に表現が不適当かもしれませんが、往生際の悪いもので、一年以上経った今でも、祖母も祖父も、亡くなったのだという実感がありません。

今でもテーブルのわきにあの優しい祖母がちょこんと座っているのではないか。

今でも座布団を枕にした祖父が、よう、と片手を上げるのではないか。

もしも今本当に祖父母が目の前に現れたとしても、何の違和感も持たないかもしれません。気付いてしまったら、絶叫モノですが。

人が亡くなるというのは、悲しいことです。悲しい、という一言では表せないくらい、辛く、受け入れがたい事です。
けれど私は、この二人の死を通じて、たくさんの事を学びました。

現実と真剣に向き合う事の大切さ。思いやりの持つ力。両親、伯母、祖父母がどれほど尊敬すべき存在なのかということ。
私は家族が大好きです。もちろん、亡くなった祖父母も含めた、家族みんなが大好きです。
有限な時間であるけれど、これからも出来るだけ長く、一緒にいたい、話したい、笑いたい。
色々な事を教えてくれてありがとう。これからも、よろしくお願いします。

「えっと……読み、終わった……？」

恥ずかしいなあ、と思いつつ顔を除き込んだ真帆。

「……入賞、おめでとう。」

クラスメイトは、それだけ言って、真帆に原稿用紙を返した。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8164l/

around me

2011年12月18日00時50分発行